
おにまら
ภาษาไทย โดย
ARVENGER
DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止


ความรัก
มันคือ
อะไร
……
เป็นอะไร
เหรอ
เนะซึโกะ?
สำหรับผม
มันคือการ
ที่เรายอม
ทำทุกอย่าง
เพื่อให้
คนที่เรา
รัก
มีความสุข


จ๊ากกก
!!!?
เกิดอะไรขึ้น!?
ดุ้นแบบนี้เนะซึโกะ!?
ผมกำลังสับสน
ทะ... ทำไมเธอถึงได้มี
แถมยังใหญ่มากด้วย!
โอ๊ะ


เนะซึโกะ !!
ฮ้า
ฮ้า
มัน ทรมาน จัง...
มะ... ไม่ได้
เราไม่ใช่ คู่รักกัน ทำไม่ได้
หา
ได้ โปรด!
แค่มือ เหรอ?


ถึงจะรู้สึกแปลกๆ ที่ต้องสัมผัสดุ้นของคนอื่น
แต่มันเป็นของน้อง
พี่ก็ยินดี...
อื๊อห์
อาา...
เธอกำลังคราง
และขยับโยกเอว
เดี๋ยว!
หายใจไม่ออก...


โจอก
โจอก
โจอก
อดทน
ไว้!
เราจะ
ทำ
แบบนี้
ไม่ได้
!?
อ๊าา
!!
เนะ
ซึ
โกะ!


โอ๊ยยยย
!!!
ฮ๊าห์
ฮ๊าห์
อ๊าาาส์~
เนะซึโกะ!
พอแล้ว อย่าดันเข้าไปอีก
มันเจ็บ!!
ถ้าดันเข้ามาอีก พี่ต้องตายแน่ๆ!


ไม่คิดมาก่อน
ว่าจะถูกน้องสาว
ตัวเองทำแบบนี้
......
เนะซึโกะ
ขอโทษ
เจ็บ
มาก
มั้ย?
ตอนนี้
ดีขึ้น
แล้ว


ตอนนี้
เรา
ไม่เจ็บ
แล้ว
แต่
รู้สึก
เงี่ยน
แทน
!!
เนะซึโกะ
ทำต่อได้
เลย


เนะซึโกะ
ชั้นจะ
แตก
แล้วว!!
อ๊าา~
อ๊าา—


อ๊าห์
แล้วเธอก็เย็ดตูดผมอีกหลายครั้ง
เนะซึโกะจ๋า~
เนะซึโกะจ๋า~
ぱちゅ
จนครั้งหลังนี้ผมไม่รู้
ว่าเกิดอะไรขึ้น
ずぽ
แต่ดุ้นของเธอ
เย็ดตูดผมได้ลื่นและแรงขึ้น
ずぽ
ぱちゅ ぱちゅ
อ๊า
อ๊า
อ๊า
อ๊า
เนะซึโกะ!
แรงอีก!
พี่จะแตกแล้ว!!



ブチュ
ブチュ
ビュッ
ビュルルッ


ปึก
ปึก
ปึก


โอ๊ยย... เจ็บตูด ไปหมด เลย...
นี่ถ้า มีคน รู้
ว่าเรา มีอะไร กัน
แถมเรา ยังเป็น ฝ่ายรับ ด้วย
ชั้นจะ เอาหน้า ไปไว้ ไหน?

藍色を泳ぐ

きゃぱ

その日は約束していた夜の散歩に禰豆子を連れ出して、野花が咲く丘へ歩いていた。そのとき、なにやら禰豆子の様子がおかしいことに気づいた。

いつもより内股で、そわそわしていた。音を聞いてみると彼女が自身の身体に違和感を覚えていることがわかった。体調が悪いのかとも考えたが、鬼である禰豆子が人間のかかるような病気になるはずもない。

しかし禰豆子は非常に特殊な鬼である。万が一、予測できないような事態が彼女の身に起こっているとしたら。

そこまで考えついた善逸は浮ついて散歩に連れ出したことを謝罪し、禰豆子を抱えて急ぎ帰った。

胡蝶のところへ連れていこうと思考を巡らせていると、禰豆子がしきりに善逸の羽織を引っぱってきたので足を止める。

「どうしたの？　苦しい？」

屋敷の敷地内で彼女を下ろし、熱が出ていないか額にてのひらを当てようとしたとき、禰豆子の手が善逸の手首をつかんで拒まれた。

熱を測るためとはいえ、触れられるのを拒絶された。その事実が善逸の精神に影を落とし、情けない顔になる。好意を向けている相手からの拒絶というのは、その瞬間からたやすく人を傷つけるものだ。相手に悪意があろうがなかろうが関係ない。特に善逸のような繊細な人間にはよく効く。

届かなかった手を下ろそうとしたとき、禰豆子が善逸の手首を強く握った。

「え、なにっ」

ドッと背中が壁にぶつかった音がして、身動きが取れないほどの力で押さえつけられている。

「ね、禰豆子ちゃん？」

ふうふうと息を荒げる禰豆子の瞳は猫のように細く、くわえた竹からよだれが一筋流れた。

禰豆子は人を喰らわないが、今の彼女はまるで飢餓状態の鬼のようだ。しかしそれでも善逸が抵抗しなかったのは、彼女から聞こえる音が妙に不規則であることと、禰豆子を信じているからだった。

禰豆子の目を見る。美しい紅梅色のまなこが戸惑いと本能の間でゆらいでいる。うっすらと張った涙の膜が、月明かりに照らされてほのかに光った。

こんな状況でなければ、まなこの美しさに見惚れていたところだ。ただ、今は冷静に考えなければならない。

興奮しているのは間違いない。でも、なんか変だな。あまり聞いたことのない音がする。

軽く息を吸い、やさしく声をかけよう。時間がかかってもいい。すぐに弱音を吐いてしまう善逸だが、禰豆子に関してだけは根気強くなれた。

「だい……っ？」

「む！」

かっこいいことを言おうとした矢先、禰豆子が抱きついてきて声が出なくなった。

彼女は善逸にぴたりと身体を密着させて、ゆるゆると腰をゆらしたのだ。

「ひっ！　ねねね禰豆子ちゃん！　なにしてるのダメダメダメ！　なんでかわからないけどダメな気がするぅ！」

隙間を埋めるようにくっついてくる禰豆子の肩をつかんで、はなそうとする。しかし彼女は絶対にはなさないとでもいうように、鬼の力で身体をくっつけたまま腰をゆらす。

なんだこれ！　なんだこれ！　これじゃあまるで……！

体温が一気に上がって肌を真っ赤に染める。

色事に関して無知ではないが経験豊富でもない善逸は、禰豆子に腰をこすりつけられながら真っ赤になるしかなかった。引き剥がそうとしていた両手は肩に置かれたまま力を失くし、汗が噴き出る。

妖しい腰つきに善逸の身体の中心に熱がこもる。こんな外で勃たせたらまずい。見つかったらなんて言い訳すればいい。さきほどとは違う意味で危機を感じて必死になった結果、善逸は禰豆子を抱きしめて、強く地面を蹴った。

抱き合ったままの不安定な体勢ですばやく移動する。とにかく人のいない部屋へ行かなければと、耳をすませて人間の音がしない場所を探した。

そしてそれは案外簡単に見つかった。まっくらな空き部屋に音を立てずに忍びこむ。草履を隠しておくことも忘れない。

畳の上に禰豆子を下ろして、一息つく。するとまた

抱きついてきたので、今度はきちんと受け止める。まだ息が上がっている禰豆子を、どうしたら落ち着かせられるだろう。

彼女は発情している。しかしどう発散させたらいいのかわからないのだ。だからといって、彼女に手を出すなんてとんでもない。善逸ができるのは、自然と落ち着くまでそばにいてあげることだけだ。

「……って、禰豆子ちゃん！　待って！　俺今紳士になろうとしてるところだから！　お願い！」

考えごとをしている間に、禰豆子が善逸を押し倒して服を脱がそうとしてくる。さっき熱くなったところが、また熱くなり始めた。

今しがたの決意はすでに泡となって消えそうだ。油断すると、禰豆子はすぐに腰をゆらす。しかも押し倒されているので、より生々しく感じてしまう。

「ふ……う」

自分の上で何度も何度もゆれる彼女を見ていると、いよいよ善逸にも情欲が湧いてくる。

ダメだ。早く止めないと。早く。

そう思っているのに止められない。声を出そうとすれば喘いでしまう。

時は戌の宵五つを迎えるところで、まだ寝静まる時間ではない。これ以上声を上げたら見つかりそうだ。

禰豆子はかまわず腰を振る。服は中途半端にはだけさせたままだったが、股がこすれるのが気持ちいいのか腰振りに夢中になっている。

「あっ……んんっ」

袖を噛んで声を抑える。禰豆子からいろんな音が聞こえる。心臓が脈打つ音、血の巡る音、情欲に濡れた音。

涙目のぼやけた視界で、禰豆子が脚を開いてゆれている。ひどく扇情的な光景をぼんやりと見つめ、強くこすられた瞬間身体に電撃が走る。

「ぐっ……！」

どちらが上げた声なのか判別がつかないくらい頭が真っ白になった。全身が脱力して、股のところが湿っぽい。

ああ俺は、なんてことをしてしまったんだ。

禰豆子を止めるどころか一緒になって気持ち良くなってしまった。炭治郎と禰豆子に対して、明日からどんな顔をすればいいのだろう。

上にいる彼女はぼーっと善逸を見ている。そして、自身の着物の裾をたくし上げる。女性的なやわいふとももの間から、ゆるく勃起した陰茎が出てきた。

「……え？」

善逸は理解が追いつかずぽかんとする。禰豆子は女性だ。炭治郎も妹だと言っていた。それに間違いも嘘もないはずだ。それなのになぜ、禰豆子に陰茎があるのだろう。

「う、う！」

「あ、うそ……」

善逸の考えがまとまる前に、禰豆子は自分の陰茎に手を伸ばしてしごき始めた。その手つきは拙く、もどかしそうだ。

好きな子の自慰を見た羞恥に手で顔を隠すも、指の間から見てしまう。達したくてしかたがないのに、思うように達せないらしい。かわいそうなほど切なく呻く禰豆子に、いつのまにか手を伸ばしていた。

「う？」

「お、俺がやってあげるよ。じっとしてて、ね」

上に乗っていた禰豆子を畳に座らせて、自分は四つん這いになる。脚の間の陰茎に手を添えて、口内に唾液を溜めたあと舌を出した。

どろりとあふれた唾液が舌先から滴り、禰豆子の陰茎を濡らす。それから舌を鈴口に当てて、丁寧に舐めた。

禰豆子ちゃんの大きいなあ。俺の口に全部入るかな。

ここまで来たら、もはや禰豆子に陰茎がある謎などどうでもよくなっていた。

それよりも大好きな彼女を気持ちよくしてあげたいと、心の底から思った。だから懸命に舌を動かし、彼女が痛がっていないか音を聞き分ける。気持ちよい音が聞こえると、善逸の心が躍った。

先のほうから竿、竿から袋のところまでねっとりと舐め上げる。浮き出ている血管の上を舌が通れば、禰豆子の腿が震えた。空いていた片方の指で袋を揉み、より高みを目指せるように促す。

口淫に熱中すればするほど、善逸のものも熱くなった。膝をこすり合わせ、無意識に腰が浮く。

「はあ、む」

かたくなってきた陰茎を深く口に含む。予想以上に大きくて息が苦しい。しかし身体はそれすらも快感に変えていく。むせない程度に呑みこんで、頭を前後に動かした。

ちゃぷ、ちゃぷ、とみだらな音が暗闇に響く。禰豆子の眼下で金色の髪がゆれ、いやらしく腰をくねらせた。

「む、う、う——！」

「んぷっ！」

陰茎がふくらんだと思ったら勢いよく熱い体液が口に入ってきた。独特の味とにおいのするそれを、善逸は呑みこんだ。

口をはなさないまま、最後まで出し切れるように吸いながら陰茎をしごく。畳を汚さないために一滴残らず呑んだ。

上目遣いで禰豆子の表情をうかがう。彼女は絶頂の余韻でうっとり目を細めていた。

よかった。気持ちよかったみたい。

安心したのも束の間、ふっと目の焦点が合った禰豆子が善逸を見下ろすと、金色の頭をつかんで陰茎を根元まで突っこんだ。

「えうっ」

喉元まで入ってきた陰茎はあっという間にかたさを取り戻した。禰豆子の腰の動きに合わせて、陰茎が善逸の口内に出入りする。激しい行為に嘔吐しそうになりながら、必死に息をした。

苦しさを紛らわすように禰豆子の着物をきつくつかむ。酸欠で頭に靄がかかったようになり、意識が不明瞭になった。そんな中でまた精液が口に出されたものだから、喉の奥につかえて咳きこんだ。畳を汚さない努力も無駄になり、白い液体がぱたぱたと落ちる。

一方禰豆子は、むせた善逸を見て焦った様子だった。

強引に突っこまれたとはいえ、そこに悪意がなかったのは音でわかっていた。絶頂が癖になって何度も味わいかたったのだろう。

禰豆子は申し訳なさそうにやさしく善逸の背中に腕を回して、咳が治まるまで背中をさすってくれた。

それにしても、なんとも奇妙な夜になってしまったと思う。

好きな女の子とみだらに腰を合わせ、口淫までしてしまった。

たぎった陰茎は禍々しいほど立派なものだったが、禰豆子のものだと思うと嫌悪感はなかった。むしろ舐めている間の興奮は、今後自分を慰めるときに思い出してしまいそうだ。

今も物足りない。腰がうずいてしかたないのだ。甘い痺れが欲に火をつける。

「ねずこちゃん……」

顔を近づけて、竹の轡にくちびるを寄せた。

彼女の丸く戻っていた瞳が再び細くなる。きれいな梅の色が善逸を捉えた。

かわいくて強くて、大好きな女の子。善逸の心にあたたかく存在する彼女。

もっと、彼女の音に満たされたい。

禰豆子の指が善逸の手に絡まる。尖った爪で肌をやさしく撫でられ、ぴくりと跳ねた。そのわずかなやりとりで、心を交わす。

藍色の夜に、軽々しい言葉はいらない。彼女の音に集中するだけでいい。

まだ夜は始まったばかり。夜は長く、今はふたりの味方だった。

甘美な指遊びが終わる頃、月明かりすら届かない暗い部屋で、布擦れの音が静かに響いた。

あとがき

このたび、でんめかさんのねず善本にゲストとして書かせて頂きました。

鬼滅にはまったのもでんめかさんからのおすすめのおかげでした！こんなおもしろい漫画を教えてもらって、本当にありがとうございます！

鬼滅はキャラがみんな魅力的なので、推しが多すぎてもはや箱推しです。

その中でも善逸くんは本当にかわいいですね。臆病でよく泣くけど、やさしさを持ち合わせた子は非常にグッときます。そしてそんな子がかわいい鬼の女の子である禰豆子ちゃんを好きになる。最高ですね！

さらにもともとふたなりの女の子が好きな私にとって、ふた禰豆子×善逸を書かないはずがなかった。書いている間とっても楽しかったです！

それではここまで読んでくださった方、ゲストに呼んでくださったでんめかさん、本当にありがとうございました！

きゃぱ

ゲスト/きゃぱさん
(pixivはこちら)

きゃぱさん！素敵なねず善小説を
ありがとうございます！

Mekao/電メカ
Mail/den.meka@gmail.com
PRINTED/栄光　発行日2019/09/15
（第二版2019/09/23）
（第三版2019/10/05）
（第四版2019/10/19）
（第五版2019/11/10）

pixivはこちら↓

ご感想いただけると
励みになります！

web clap


2019/09/15
竈門禰豆子×我妻善逸

[Mekao (Den Meka)] Onimara (Kimetsu no Yaiba)